

さざなみ

上水敬由

発車の汽笛が甲高い擦れた音を立てた。

吹き下ろしていた白い蒸気を後に残して、機関車は黒く重いカラダを前方の暗闇に向けてゆっくりと動かしだした。

連結器がガチャリと音を立てて一輛目の貨車を引いた。

一輛目の貨車はいきなり引かれて、まるで驚いたかのよう
に車体をきしませながら前に出た。

連結器がガチャリと音を立てて二輛目の貨車を引いた。

二輛目の貨車は、洪々ながら一輛目の後に続いた。

連結器がガチャリと音を立てて三輛目の貨車を引いた。

三輛目の貨車は、素直に二輛目の後に続いた。

そして、連結器がガチャリと音を立てて四輛目の貨車を引いた。

それから後の数十輛の貨車は、連結器の音を遙か遠くまでさざなみのように響かせながら発進していった。

私の中にある蒸気機関車の出発の情景とは、おおよそこ

のようなものだ。

これまで目にしてきた映画やテレビドラマなどのどの作品にも、こういう〈音〉の連鎖を描いたものはなかった。

おそらく作品の成立にとつて、そんなことはまったく重要とは思われなかったのだろう。

だから不満だったのかと言われれば、別に、そこまでのこだわりがあつて作品の評価をしようなどと考えたわけではない。

ただ、すこしばかり寂しく感じたというだけのことだ。

そして、走り始めた蒸気機関車の前に広がるのは、果てしなくてしかも厚みを感じさせる漆黒の闇だ。

『銀河鉄道999』の作者松本零士が令和五年二月十三日に亡くなった。

私にとつて、彼は『男おいどん』の作者として印象深い人物だった。

この作品は、ウィキペディアによると、昭和四六年から四八年にかけて『週刊少年マガジン』に連載された。

その中の、本編とは毛色の異なる一編に（だったと思うが）次のようなものがあつた。

正確には受験浪人の資格を持たないが、傷つきながらも夢をあきらめず「浪人生活」を送っている主人公の大山昇太は、ある日、周囲の人たちの態度の変化に気づく。

数少ない友人やあこがれていた女性、おんぼろアパート

の大家や大衆食堂の親父、よく顔をあわせる近所の住人などのいづれもが、彼にももの問いたげにしつつ、詳しく話すこともなく背を向けていく。

次第に不信を募らせていた彼だったが、ある日帰つてくると、アパートは無人になつていて、大家の部屋の点けつばなしのテレビが緊急ニュースを伝えている。

それによると、地球に巨大な小惑星が近づいていて、このままでは衝突までわずかな日数しか残されていない。これが最期の緊急ニュースになるという。

そのとき聞こえてきた轟音に空を見上げると、打ち上げられた多数のロケットが遙か頭上を行くのが見える。

愕然とした彼は一瞬言葉を失うが、周囲の人間の最近の態度の意味を理解して叫ぶ。

「誰が連れて行つてくれと頼んだか！」

一時のショックから立ち直ると、何があつても決してめない彼は、どこかで見つけた棍棒を手に歩きだす。

なにしろ彼の行く道をふさいでいた連中、金持ちや知識人や女たらしなどといった、彼にとつてもよくわからない連中がいなくなつたのだ。

これからは、自分ひとりの知力と体力で道を切り開いていくしかないのだと思うと、身内に勇気が溢れてくるのを感じるのだ。

記憶しているのは、まったく正確ではないが、こんな風なストーリーだった。

先はどうなるかわからないが、孤独であつても覚悟さえあればどうにかなるだろうという大山昇太の志は、私の好むところである。

本誌『海』第二期が、このたび三〇号を迎えることになつた。

いかなる運命のイタズラか、前誌の後を受けて編集発行の重責を担うことになつた有森氏ほかの、まさに手探りと言ふしかないご苦労には衷心より感謝申し上げます。

今後も『海』第二期が、大山昇太の精神で肅々と号を重ねられんことを祈ります。